

遣明船は朝貢船として定まつた儀禮とそれに示されているいわば使命がある。しかもその質的な主目的は貿易の利である。そして限定された期限内に、限定された行動をもつて、これを果さなければならぬ。

宋元時代、または極く明の初期にかけての時代、中國に渡つた禪僧は數年乃至十年、二十年の長期に亘り彼地に滯留したものが多し。室町中期以後、いわゆる五山文學というものも全く衰退したといわれる。詩文の形式的な模倣や、辭句の智識としての累積が主となつてきたのが、その原因の一つであらう。掉尾の五山文學を代表するといわれる策彦も「生硬粗雑」であると、五山文學史稿の著者北村澤吉氏は酷評している。策彦等の入明において、折角名山大刹を歴遊しても、いわゆる上國觀光の域に止まり、また彼地の文人との交友といつても兩三回の筆談や、一、二の詩文の交換に過ぎなかつたことも止むを得ないというべきであらう。しかも彼等は中國歸りとして大いに歡迎されたのである。室町季世の五山文學や五山の宗教的活動の性格も、またこれに通うものがあつたといえよう。

最後に漂海録三卷は、崔溥が濟州島より成化二十四年正月全羅道に赴かんとし浙江南部に漂流し、ついで大運河を経て北京に上つた顛末を記したもので、策彦より約五十年前、同じ行程をとつた記録である。崔溥が北京を發し京城近く青坡驛に達したとき李朝成宗の命で漂流中の一行四十三人の日録を撰集したので、宣宗二年に至つて公刊された。陽明文庫所藏の右の朝鮮刊本等によつて印刷した。これによつて策彦の記録と對比することが出来る。

(小葉田 淳)

老莊的世界

——淮南子の思想——(サーラ叢書一一)

金 谷 治 著

一九五九年一月

平樂寺書店發行

二五九頁 三八〇圓

この書はサーラ叢書の第十一冊として書かれたもので、叢書の企畫自體が、最初から著者に對して執筆上の一種のわくを課している。それは新しい研究の内容を盛りながら、平易で興味深い讀み物となるように、という要求である。讀者は先ずこのことを承知した上で、これを批判しなければならぬ。この要求を充分に満足させることは、決して容易な業ではなく、そこに著者の苦心もあれば、讀者の異見も存することと思うが、しかしこの目標自體は、現代の要請に即した正當なものであることは言うまでもなからう。そして私の讀後感としては、この書はこの意味においては可なり成功した好著であつて、著者の勞を多としたい。

著者は斯學の新鋭で、研究の面においては近年最も旺盛な活動をつづけている一人である。もとより本書においては、この叢書の性質から来る制約もあつて、未だ必ずしも重厚深遠な研究を望み得ないが、筆端に清新の氣が溢れ、活氣ある平明な叙述がよどみなく進行しているのが嬉しい。

次に讀者は、中國哲學界の現状に照して、このテーマの取り上げ方や扱い方が何を意味するものであるかを、大略把握しておく必要がある。現代の中國哲學研究が、少くともその第一線においては、既に完全に漢學の舊套を打破して新しい分野に切り込んでいること

は言うまでもないが、しかし中國思想史という龐大な對象に對して、一般に研究者の數が不足している現狀であつて、従つて未開拓の問題が隨所にころがつている。その一つとしてこの書のテーマが取り上げられたのである。いつたい古典淮南子は古來雜家の書として見られ、諸子百家の學を雜取して編成した雜駁な書物と見られている。それは一應その通りではあるが、しかしその半面に、この書には全體を一貫する統一的な思想がある。このことも既に研究者間の常識ではあるが、しかしその統一的な思想の眞相をどのようなものと見るかに問題があり、それを精密に研究して具體的に把握した業績はまだ無い。しかもそのことは、當時の思想界を理解する上に重要な問題である。そこで著者はこのテーマを取り上げて、思想の性格の面からと、この書を産出した歴史的社會的事情の面からとの兩面から考究したのであつて、その意味で新しい研究であると言えるであらう。

さて目次を見ると、この書は次のような構成になつてゐる。はしがき

第一部 淮南王物語

第一章 淮南王とその時代

一 宿命的な誕生。二 好文の王。三 食客。四 謀反。

第二章 仙人になつた淮南王

一 登仙。二 鴻寶萬畢。

第二部 淮南王の書

第一章 淮南子二十一篇

一 淮南子の歴史。二 淮南子の内容。

第二章 老莊の統一

一 要略——多様と統一——。二 さまざまな立場。三 神話傳説。四 道とは何か。五 自然と人事——無爲と有爲——。六 政治。七 處世と養生。八 老莊の統一——眞人と聖人——。むすび

これによつて一見してわかる様に、この書は大きく二つの部分に分れてゐる。第一部は淮南王安の生い立ち、その悲劇的な生涯を説いて、淮南子の書が作られるに至つた事情を明らかにしている。宿命的な誕生、好文の性質、漢王室に對する微妙で深刻な對立關係、また漢王室の儒敎による思想統一政策に對して、おのづから淮南の地が、中央にいられない不平の老莊學徒の淵藪となつたこと、その結果は遂に謀反の罪を構成されて自殺して果てたこと、歿後登仙したという説話が發生していること等が、史記・漢書その他の基本的な史料によつて、劇的に平易に展開する。解釋や構成のしかたには、當然著者の主觀が若干混じてゐるが、大すじは充分明快で説得力をもつてゐる。讀み物としても面白く、次に分析する淮南子の書の内容に對する興味をかき立てる。

第二部は淮南子の書とその思想との研究である。先ず現存の淮南子の書の歴史から説き起してその書の構成に及び、更に思想の檢討にはいる。はじめに多様な内容、そこに含まれたさまざまな立場、またそこには中國の古典に乏しい神話傳説が多量に含まれてゐるという特色もあること、と説き進み、最後にそれをつらぬく統一思想の實態を明らかにそれを強調し、その意義に及んでゐる。

著者によれば淮南子の最後的一篇である要略篇は、この書の複雑多様な内容を要約的に示すと共に、その統一の立場の性格をよく示している。それは老莊による百家の統一である。いつたい老子と莊

子との關係は、必ずしも一方が他方に先行し、後者は前者を受けて發展させたという如きものではなく、もと別個に發生した二つの道家思想である、というのが著者の見解である。そして淮南子の統一の立場は老子と莊子とを合同した老莊の立場であるが、より多く莊子的である。老子の道は、萬物を生み出す根源、本體としての性格をもつが、莊子の道は雑多な存在を一貫する根本理法としての性格をもち、そこから萬物にはそれぞれ個性がありとりえがあつて、齊しくそれぞれに尊重すべきものであるという齊物の思想が由來する。百家の學の長短をそれぞれ在るがままに認めながら、その中に統一の理法の存在を説く要略篇を、より多く莊子的であるとするのはその爲めである。しかし、また、老子は實行的行動的であり、その「無爲」は「爲さざることなき」萬能を求めるのに對して、莊子は精神的觀念的であつて、對立に満ちた雑多な世俗のそれぞれの個性を認めながら、その束縛を離れた自由な世界に逍遙して遊ぼうとする。ところで、要略篇の立場が世俗の道である百家の個性をそれぞれに認めて、そこに一貫した理法のあることを説くのは莊子的であるとしても、單に百家の事功を超越しようとするのではなく、儒・墨・名・法等の百家を綜合して百家がそこに包攝されて存する道を百家に即して説いているのは、著者のいわゆる老子のとも言えようか。かくて事と道との統一が淮南子の立場であり、言わばそれは、老莊思想による百家の統一である。老と莊とを統一したのは淮南子が最初であり、老莊によつて百家を統一したのも亦淮南子に始まる。そこに「老莊的世界」の最初の建立を見るのである。

著者の老莊に關するこのような見解は、この書の隨所に、また著者の別の論文に、種々の角度から觸れられているところであるが、

讀者の意見は種々であらうから、そこに若干の異見も存しよう。しかし著者のこの見解は、老莊に關する少くとも一つの傾聴すべき解釋であることを失わない。そして著者はこの思想の成立展開の意義と役割りとを、當時の社會情勢・政治情勢・文化狀況等と考え合せて種種の角度から検討するが、最後に巨視的に一瞥して次のように斷定する。

『淮南子』は、雑家の書であるよりは、むしろ道家の書とみるべきものであらう。そして、そうした道家思想の展開は、統一理論を求める當時の一般的な趨勢にうながされたものであらう。

『史記』の『六家要旨』そのものが、既に六派の哲學もめざす所は一つで、從つて當然統一さるべきだ、という主張をその根底に持つ。秦の『呂氏春秋』、『莊子』の天下篇をはじめとして、戰國末の成立とされてきたいわゆる諸子の書物の雑家的傾向は、恐らく秦からこの『淮南子』の時代へかけて、統一王朝の出現に伴なう統一理論を要請する大きな歴史的要求に従おうとした結果のことであらう。そして董仲舒があらわれて儒教の輝やかしい勝利がもたらされたが、『淮南子』は、そうした儒教の動きに對抗して、道家の立場から提出された統一理論の試みであつた。(二五九頁)

蓋し要を得た妥當な斷案であらう。

以上、私は、この書に對する粗笨な私ながらの紹介を試みたが、最後に私の疑問とする一二點だけを記して、著者に益を請うことにしよう。細部の異見については今は觸れない。

思うに著者の學風は、一種の文獻學的教養を身につけた實證主義であるが、近年の作品には、問題を歴史的事實と考え合せ、政治情勢・社會情勢との不離な關係を考慮して、思想を具體的事實におい

て把握しようとする意圖が見える。これはもとより正しい方法であるが、しかし未だ歴史そのものを自覺的につぎつめた形で構成的に理解しているようには見え、従つて著者自身の史觀——これはもとより歴史の立場からは、常に反省さるべき假説としてのみあるべきであるが——の存在が疑われる。當然著者は、單なる常識と勘とに頼つて問題を取り上げていることになるのであつて、その意味では未だ充分に方法的であるとは言えない。もつともそれだけに公式主義に墮する危険はなく、著者の生な感覺によつて歴史を讀み、著者なりに具體的に人間をとらえてその思想を論じているのであつて、そこに一面の長所もある。しかし思想史の場合には、思想史の對象である思想とはいつたい何であるかを明確にする爲めに、歴史の自覺的構成的把握の原理が要求されるのであつて、著者のこれに對する見解を聞きたいものである。もとより私はこのような性質の書物において、その充分な説明をもとめるつもりはないが、私には著者の叙述の中に、それが讀みとれないままに、若干の疑問を感じ

る。次に史料の取り扱いについては、文獻學に詳しい著者であるだけに、概して手堅いものがあるが、『秋秋帖』紙背の「淮南兵略聞詰」を、隋末唐初の筆寫と認定する根據が聞きたい（一〇四頁）。この兵略聞詰は、その體裁に既に許高二本合様の姿を呈していると思うが、許高二本の合様が、早くとも安史の亂以前に考えられるであろうか。書體についても亦、私は隋末唐初という認定に若干の疑問を抱くものである。

古典のテキスト・クリティックについては、學者の間に種種の異見のあるのは已むを得ないとしても、著者の専門的見解は概ね尊重

に價するであらう。

なおついでながら、本書の題名について、私の知るところに基いて、一言著者の爲めに辯じておこう。本書は『老莊の世界』を掲げ、『淮南子の思想』という副題をつけることによつて、内容の輪郭を表現しようとしている。これを若し論文の題として見れば、むしろ正題と副題とを逆にするとか、『老莊思想による百家の統一』というような意味を明示した題をつけるとかが、一層妥當であらう。しかしこのような叢書の一冊としては、専門的な内容を廣く一般に紹介する讀み物として要請されているのであつて、素人にも一見わかり易い印象的な題名を選ぶ必要もあらうし、この叢書に屬する他の書物の題名との關係もあつて、企畫者や書肆の角度よりする注文もあるはずである。そこに當然著者の苦衷があるのであつて、特に、『あとがき』を附して辯じた所以であらう。その結果が妥當であるか否かはもとより論じる餘地はあらうが、必ずしもすべてが著者だけの責任ではなからう。

以上は私の疑問とするところを一二掲げたに過ぎぬが、若し望蜀の望を言うならば、説いて詳でないところを若干指摘することもできよう。しかしこのような性質の小さい書物では、あくまで詳細深遠を期することは最初から無理であつて、一般讀者に對しては、大まかでも基本的な知識を正確に提供し、妥當な印象を鮮明に與え得れば成功であり、學者に對しては、新しい種種の問題を喚起できればよいわけである。私は本書の出来ばえを完全無缺だとは思われないが、以上のべた疑問や要求を以て、一義的に本書の缺點と斷じるものでもない。ただ、この一小好著の出現を喜ぶと共に、前途洋々たる著者の今後の發展を祈るものである。

（木村 英一）